

## 日本の新型インフルエンザ対策の現状と課題

東北大学大学院医学系研究科微生物学分野

押谷 仁

日本での新型インフルエンザ対策としては2005年にWHOのガイドラインに基づく行動計画が作成され、2007年の3月にはより詳しいガイドラインが作られている。また同時に抗ウイルス薬の備蓄やワクチンの開発などが進んでいる。しかし欧米の先進国に比べると日本の新型インフルエンザ対策は大きく遅れをとっているといわざるをえない状況にある。日本の新型インフルエンザの問題点としては次のようなものが挙げられる。

- 1) 国や都道府県レベルでの対応が中心となっており、市町村やコミュニティーでの対応が十分に検討されていない。
- 2) 早期対応に力点が置かれていて、日本国内で大流行が起きたとき（すなわちフェーズ6）の具体的な対策が十分に考えられていない。
- 3) 地域封じ込めや国境での水際対策など有効性の検証が十分に行われていない対策が中心となっている。
- 4) 備蓄された抗ウイルス薬の配布方法、ワクチンの優先順位、発熱外来の設置など具体的な対策の実施方法が決まっていない。

次の新型インフルエンザがいつどのようにして発生し拡大するかということに関してはわかっておらず、全く予期しないような形で発生することも考えられる。このため新型インフルエンザへの対応計画は、柔軟な対応ができるようなものである必要がある。また、新型インフルエンザの影響は社会全体に及ぶと考えられており、その対策は国民生活に大きな犠牲を強いるものとなる可能性もある。したがって、広く一般国民にこの問題を理解してもらった上で、社会全体でこの問題を議論する必要があるがこの面においても日本では大きな課題が残されている。